



夢を叶える方法論。

太田哲也が2001年から続ける講演活動は、高校生に始まり中学生や専門学校生、今では小学生にまで膨らんでいる。「チャレンジ/Keep On Racing」を合い言葉に、小学校出張授業を行って全国の子供たちに「夢を持つことの大切さ」、「チャレンジすることの意味」などを、自らの体験談を通して説いている。その真髄たる「夢を叶える方法論」「クルマ好きを増やす」という考え方は、太田が生きてきた経験ゆえの内容であり、彼以外では決して語れない講演である。



出張授業「夢を実現するためにチャレンジ」は、出光興産のバックアップのもと公募で選ばれた日本全国の学校に Outreach、自身の経験に基づいた講演(授業)を行うもの。

ひ とりの女子高校生から送られてきた1本のメールが、太田哲也の、今、を形づくるキッカケとなった。「愛知県高校生フェスティバル」という団体からの講演依頼だ。

愛知県高校生フェスティバルとは、主に親の経済的な理由で学業を断念せざるを得ない状況に直面した高校生を支える団体だ。私立高校生が主体となってイベントを開催し、収益を得て支援を行うという活動をしている。そして団体の会長であった女子高校生が、太田哲也が直面したあの事故からの復帰を捉えた著書や映画に感銘を受け、50校が集まるイベントで「体験談を話して欲しい」と依頼してきたのである。何千人を前に自らの体験を話したことなどなかったし、まだ顔や身体には事故の傷跡が残り絆創膏だらけだったが、それでも太田は快諾した。

「とにかく最初は自分のことを話した」と振り返るが、療養中の苦しみを乗り越え、将来への不安とどう向き合い活路を見出すのか。太田の言葉は、彼らの心の奥底にまで届いた。以後、加速度的に評判が広まり、太田のもとにはたくさん講演依頼が舞い込むことになる。対象は高校生ばかりではなく、中学生や専門学校生、そして企業での講演に至るまで幅が広がっていく。彼の声はのべ3万もの人たちへと届き、2005年には中日新聞で連載したコラムをまとめた「生き方ナビ(清流出版)」なる書籍も発信した。

こうした講演活動を祖として、現在へと続く活動の拡がりをみせたのが2009年だった。出光興産株式会社との協力により「チャレンジ/Keep On Racing」を合い言葉に小学校への出張授業が始まったのである。出光興産は社会貢献活動を重視する企業風土を持ち、それが太田の考えとシンクロした。出張授業は朝日小学生新聞紙上で募集されるが、毎年100校以上が応募してくる。

「最初は小学生相手にどんな話ができるのか。通じるのだろうかと思っていた。でもそんな心配は杞憂に終わった。小学生でも人の感情の動きとかよくわかるんだよ。逆に彼らとのコミュニケーションを通じ、いろいろなものも教えてもらったんだ」

太田は大勢の前で話し続けたこの10年、決して同じことばかりを繰り返して来たわけでも、自らの体験談ばかりに終始したわけでもない。常に子供たちの言葉や表情を真っ向から受け止め、時に社会情勢を踏まえ、苦悩も重ねて、ベストと思える発言を選んで来た。話しながら思いついたことを盛り込むことも少なくない。

TEXT●中三川大地(Daichi Nakamigawa)
PHOTO●田中秀宣(Hidenobu Tanaka)



太田氏が事故に遭った際の映像も収めたドキュメントビデオの上映。講演、そして質疑応答の構成で授業は進められる。また、太田氏が実際に使用しているヘルメットやレーシングスーツの展示、東日本大震災発生直後に活動した際に撮影したボランティア活動の様子も貼りだされ、子供たちがいずれも興味深そうに見ていたのが印象深い。



「俺もまだまだチャレンジャーを続けているし、成長中なんだ。迷うことがあれば失敗もある。チャレンジャーすることで失うものもある。そうやって新陳代謝しているからこそ、言葉に説得力が生まれると思ってる。ちょっとカッコ良すぎるかもしれないけど、見ているのは未来だから」

太田と小学生たちとは、人間同士のぶつかり合いである。講演後の質問コーナーでは子供たちから投げかけられる問いに即答していく。

「反射神経が必要で、どきどきわくわくするよ」

もちろん適当に言葉を濁すわけにはいかない。「いつも真剣勝負だ」と太田は言う。

先の言葉にあるように、太田自身もまた子供から学んできたのである。「俺は残りの人生で何ができるのか。最近はそのことを考えている。若い頃は、レーサーとして自分が輝くことばかりを追求した。だからこれからは人を育てることに尽力しよう」と、ただし人を育てるといっても、いつも同じ目線に立ち、共に考え、という視点を忘れることはない。

「俺もまだまだチャレンジャーを続けているし、成長中なんだ。迷うことがあれば失敗もある。チャレンジャーすることで失うものもある。そうやって新陳代謝しているからこそ、言葉に説得力が生まれると思ってる。ちょっとカッコ良すぎるかもしれないけど、見ているのは未来だから」



様々な学校や集いで講演活動を続けてきた太田氏の元には、講演内容に対する感想文や手紙がたくさん届いている。そのすべてに目を通し、常に気持ちを新たにしているという。

その現場を知ろうと今回、2012年度の小学生出張授業を訪れた。場所は東日本大震災の被災地でもある、宮城県松島町の松島第五小学校。震災の影響で過疎化が進む地域を少しでも元気づけようと松島第五小学校が選ばれたのだ。全校生徒83名のうち、高学年(4〜6年生)の43名が太田の言葉に耳を傾けた。

改めて講演内容を紐解こう。事故の体験談から始まり、次第に話は未来へ向かって進んでいく。現在、講演内容の核となるのは「夢を持つことの大切さ」「夢を叶えるためにはどうしたらよいか?」「チャレンジャーすることの意味」そして「クルマを好きになって欲しい」ということ。子供たちに対し、夢と、挑戦、の意味を伝えている。

注目すべきは「ただ夢を持って、挑戦せよ」の訴えだけではない。夢を叶える方法論。こそが子供の欲しているものだと考えるからだ。

「子供の頃に将来の夢を持ちなさいと言われた。だけど実際は将来になりにくいのか分からない人のほうが多い。だけど子供たちは、夢を持っていないことがまるで悪いことのように思ってしまう」

太田は自身を振り返る。彼とて子供の頃からレーサーを目指していたわけではなかった。むしろレーサー

として異例なほど遅咲き。社会人になってからレーサーを目指した。子供の頃から夢がなくても、成長できることを自らの人生で証明した。

かといって夢を持たない子供が、ただぼうっと生きていいというわけではない。彼がレーサーを目指したのは、好き以上に、それが自分に向いていると確信したからだ。

「自分はこういうものに向いているな、あるいは向いていないなっていう取捨選択はできていた。夢は大事だけど、誰もがプロ野球選手にはなれないように、自分に向いている仕事を探すのが重要だと思った。向いていけば最初は好きじゃなくても後から好きになるし、まわりから「ありがとう」と返ってきて評価もされ、自然とやる気が生まれる」

仕事に限らずだが、好きだから向いているとは限らない。しかし向いているから好きになる、はある。だからこそ子供たちに対して、ただ漠然と夢を持っていいのではなく、「いろいろとやってみよう。向いていることを探そう」と説く。

子供たちの元気な挨拶や無邪気な質問に対して、太田はひとつずつ丁寧に答えていた。そして決して上からではなく同じ目線で、夢を聞き、実現するためのアドバイスも行う。なかには震災で引越してきた子供もいたけれど、まるで生きる活力を太田に求めるように、元気に楽しそうに接していた。

また、初めて見るレーシングスーツやヘルメットに興味津々の様子だったのが印象深い。先の質問コーナーでもクルマやレーサーに対する質問がたくさん出た。いまの子供は決してクルマに興味

がないわけではない。それを潰しているのは経済合理性ばかりが先行した夢のないクルマに乗る大人たちのせいだと訴えているようだった。

「少なくともフェラーリなどのスーパーカーを見る子供たちの姿は俺たちの頃と全然変わらな。それを『無理だよ』と諦めさせず、将来はフェラーリに乗ってやるぞって思う子供がひとりでも増えて欲しい。クルマを好きになって欲しいという意味を込めたのはそういう思いがあるからだ。小学生なんて、まだ無限の可能性を秘めているんだから」

こうしたクルマ好きを増やす普及活動は太田の多大な功績のひとつだ。彼の発言に感銘を受けて育つ人間が増えれば、確かに未来の自動車社会は明るくなるだろうと思えた。子供にはクルマの魅力を伝え、大人にはドライビングスクールを通して正しい運転技術を教える。それは安全な交通社会を構築すると共に、子供が憧れるような、格好い大人になる手助けでもある。もちろん、ジャーナリストとして自動車を評価する活動ともリンクし、自らの考え方を落とし込むオリジナルブランド「TEZZO」はクルマ好きを増やすため、クルマ自体の魅力を高める取り組み

常に子供たちに対して真摯に向き合っ質問に応え、相談に乗り、時には冗談も交えながら語る姿に子供たちはすぐに打ち解けていった。質疑応答も終わり給食の時間になっても太田氏を取り囲んでの質問攻めは終わらない。この出張授業の様子は朝日小学生新聞に掲載され、記事を読んだ全国の小学校から出張授業の依頼が集まる。



常に子供たちに対して真摯に向き合っ質問に応え、相談に乗り、時には冗談も交えながら語る姿に子供たちはすぐに打ち解けていった。質疑応答も終わり給食の時間になっても太田氏を取り囲んでの質問攻めは終わらない。この出張授業の様子は朝日小学生新聞に掲載され、記事を読んだ全国の小学校から出張授業の依頼が集まる。

「子供たちの元気な挨拶や無邪気な質問に対して、太田はひとつずつ丁寧に答えていた。そして決して上からではなく同じ目線で、夢を聞き、実現するためのアドバイスも行う。なかには震災で引越してきた子供もいたけれど、まるで生きる活力を太田に求めるように、元気に楽しそうに接していた。」

「子供たちの元気な挨拶や無邪気な質問に対して、太田はひとつずつ丁寧に答えていた。そして決して上からではなく同じ目線で、夢を聞き、実現するためのアドバイスも行う。なかには震災で引越してきた子供もいたけれど、まるで生きる活力を太田に求めるように、元気に楽しそうに接していた。」

「子供たちの元気な挨拶や無邪気な質問に対して、太田はひとつずつ丁寧に答えていた。そして決して上からではなく同じ目線で、夢を聞き、実現するためのアドバイスも行う。なかには震災で引越してきた子供もいたけれど、まるで生きる活力を太田に求めるように、元気に楽しそうに接していた。」

「子供たちの元気な挨拶や無邪気な質問に対して、太田はひとつずつ丁寧に答えていた。そして決して上からではなく同じ目線で、夢を聞き、実現するためのアドバイスも行う。なかには震災で引越してきた子供もいたけれど、まるで生きる活力を太田に求めるように、元気に楽しそうに接していた。」

太田哲也×GENROQ
Tetsuya Ota ENJOY&SAFETY DRIVING LESSON
 with Jaguar&Land Rover supported by 出光

太田哲也氏が主宰する「Tetsuya Ota ENJOY & SAFETY DRIVING LESSON by 出光」が、GENROQ と初コラボイベントを開催。通常のサーキット初心者からでも無理なく参加できるスクールとともに、スピノフ企画として、スパタイGP(スーパータイムアタックグランプリ)第6回も開催予定。本誌読者の方々も「安全&マナー」について太田哲也校長をはじめとする講師陣から教えてもらえるチャンス。今回はジャガー・ランドローバー・ジャパンの協力により、教習車両にはジャガーを予定。また、パドックにおいてもイヴォークなど最新車両の体験試乗コーナーを設置する予定だ。講師が先導する「先導走行」の際には、同乗者の方も一緒に参加者の車両に乗車可能(定員まで乗車可能)。家族も一緒に先導走行を楽しめる(チャイルドシートが必要な場合は、自身で準備を)。ぜひ、皆様奮って参加を!!

開催概要(予定)
 ■日時:2012年12月22日(土)
 10:00~17:30(走行時間は午後)
 ■場所:袖ヶ浦フォレスト・レースウェイ
 ■内容&参加費:
 サークルクラス 2万円(ランチ込み)
 入門クラス 1万2000円(ランチ込み)

お問い合わせ・お申し込み先
 〒224-0006 横浜市都筑区荏田東2-9-1
 (株)ATO内太田哲也スポーツドライビングスクール事務局
 ☎045-948-5540 FAX 045-948-5536
 e-mail info@sportsdriving.jp
 URL http://www.sportsdriving.jp

いよいよ12月22日開催!

組みというふうに取りれる。このように、この10年の講演活動から得た思いがなければ、いまの太田哲也の活動は実現していなかった。共に成長する、そしてチャレンジャーを忘れない。この言葉をいま一度噛みしめると共に、すべての大人に伝えたいと思った。